

平成 22 年 6 月 18 日現在

研究種目： 基盤研究(C)

研究期間： 2006 ～ 2009

課題番号： 18529001

研究課題名 (和文) デジタルアーカイブとしての文学全集の可能性  
— 編集文献学に基づく新時代の文献学の模索

研究課題名 (英文) The Possibility of Creating Complete Works as Digital Archive:

In Search of a New Age of Philology Based on Textual Scholarship

研究代表者

明星 聖子 (MYOJO KIYOKO)

埼玉大学教養学部・准教授

研究者番号： 90312909

研究成果の概要 (和文) :

ドイツ編集文献学を中心に欧米の文献学関係の各理論を比較検討しながら、同時に、欧米各地で展開されている文学デジタルアーカイブプロジェクトについて現状を理解し、将来の文学資料デジタル化時代を見据えた新しい文献学のありようについて模索した。活動としては、各種研究会の実施と文献読解、学会参加等を中心におこない、それらを通じて考察を重ねた成果は、主に論文の形で発表した。本研究で得た数々の知見のうち、もっとも重要なものは、編集文献学の問題領域が、ITの発展による画像の活用の増加に従って、今後アーカイブズ学の問題領域と重なっていく可能性を示したものである。

なお、本研究は、派生的に、翻訳プロジェクトやシステム開発も試みた結果、訳書の刊行やプロトタイプを試作といったスピンオフとしての成果物も生んだ。最終年度にいたっては、当該分野に関する日本で初めての国際会議を企画、運営し、国内外からの多くの参加者を得て、本テーマをめぐる議論を広く喚起することに成功した。

研究成果の概要 (英文) :

In this project we attempted to investigate the current theoretical discussions in the field of textual scholarship, especially highlighting the recent conflicts and rapprochement between German "Editionswissenschaft" (Scholarly Editing) and Anglo-American textual studies. Additionally we also tried to survey and analyze the practical applications of several representative digital archive projects in the western world. These research activities were carried out through the organization of work shops, conducting translation projects, and managing software development etc. One of the most fruitful inquiries is with the essay, pointing out the possibility that the dilemma concerning the "representation" of the material characteristics of books could transform the field of scholarly editing into a new field, which could be referred to as "Archival Science". What is of particular note is how this research contributed to the successful planning and organization of the international conference "New Directions in Textual Scholarship", the first academic meeting for this field in Japan which took place in March 2010 during the final year of the project.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	180,000	780,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 文学・ヨーロッパ文学

キーワード： 編集・文献学・文学・デジタル・テキスト・アーカイブ・全集

1. 研究開始当初の背景

(1) 欧米における文学研究資料をめぐる文献学的議論の発展

研究代表者は、本来の専門であるドイツ文学のカフカ研究における方法論的な立脚点から、学術版文学テキストをどう編集するかという問題に長年関わってきた。この種の議論は、ドイツでは編集文献学 (Editions-wissenschaft)、またフランスでは生成批評 (Critique Génétique) 関連、また英米では新書誌学 (New Bibliography) の関連の各領域で、20 世紀後半から連綿と展開されてきた。さらに 90 年代頃から近年にかけては、紙メディアからデジタルメディアへの大きなメディア環境の変化に対応すべく、情報学的、工学的な領域との横断的に交流へ、さらにインターネットの普及に伴っては、各国別の境界を越えた国際的な共同の取り組みへと進展していった。研究代表者はその動向にかなり初期の段階から着目し、理解と検討につとめてきた。

(2) 日本でのデジタルアーカイブ関係分野における文献学的議論の立ち後れ

上記のような欧米の動向と反して、日本では、そもそも紙メディアの時代においても、文学研究資料としてのテキスト編集に関して理論的な議論は展開されてこなかった。そうした基盤となる議論も経ないまま、わが国はデジタル化時代を迎えたのであり、結果的に、文学研究資料としてのデジタルアーカイブの開発は、大勢としては、人文学的というより、情報学的な問題解決を中心に進められていった。

(3) IT の発展によるテキストデータから画像データへの力点の移行

今世紀に入っところから、IT の急速な発展によってプロセッサやストレージやネットワークといった物理的なものにかかるコストは限りなくゼロに近くなった。それに伴い、かつては大問題だったデータ量に関する考慮も必要なくなり、欧米の人文学分野の資料のデジタル化をめぐる議論も、テキストデータに関する事柄から、画像データの活用をめぐる問題へと重点が移されてきた。画像データのこうした重視は、まださほど表立っては意識されていないものの、研究基盤としての文学資料の考察を、エディションの問題領域からアーカイブへの問題領域と移行させていくものと見なされる。

2. 研究の目的

欧米の研究動向を踏まえたうえで、デジタルメディア時代にふさわしい文学研究資料基盤形成のための新しい文献学の可能性を模索する—これが、今回の主たる研究目的である。その目的に向けて、上記 3 点の背景との関連のなかで、本プロジェクトでは以下の 3 つの課題に取り組んだ。

- (1) 紙メディアを前提とした編集文献学理論の検討
- (2) 欧米の文学系デジタルアーカイブ・プロジェクトの現状分析
- (3) アーカイブズ学との接点の模索

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究会の実施

日本ではまだあまり知られていない編集文献学の学問動向を、他の人文学研究者に広く紹介すると同時に、関連する諸分野との有益な接続をめざして、大小さまざまな研究会を繰り返し企画した。とくに、2年目からは、研究代表者が、分担者として参加する日本文学関係プロジェクトと共同する形で、文献学研究会や基礎講座、またワークショップ等を開催した。

#### (2) 文献の調査・解読と翻訳

欧米の変種文献学の理論の検討とその実践としての各地のデジタルアーカイブプロジェクトの現状分析のため、数々の文献を渉猟し、精査した。なかでも重要なものについては、本研究に関心をもってくださる方々に協力をいただいて、翻訳プロジェクトも展開し、議論を交わしたり作業を共有したりしながら、理解と解読に努めた。

#### (3) 研究支援ツールのプロトタイプ開発

当初は、開発には取り組まない計画を立てていたが、研究の進展にともない、理論的検討の有効性を検証すべく、文学研究支援のためデータベースシステムを設計士、スピノフとしてのプロトタイプの開発も試みた。

#### (4) さまざまな国内学会、国際会議への参加

欧米と異なり日本には編集文献学の学会がまだ存在していないことから、研究成果の発表および研究交流のために、出版学会やアーカイブズ学会等、さまざまな関連学会へ積極的に参加した。

#### (5) 国際会議の開催

最終年度は、海外の研究状況を日本の研究者に伝え、また同時に、日本の現状を海外のコミュニティへ発信するために、国際会議を企画し、運営した。

### 4. 研究成果

上記の方法により、以下のような具体的成果を得た。

#### (1) 研究会の開催は、これまであまり接点のなかった日本文学研究者や日本史研究者、

また中国文学研究者の方々との幅広い交流につながり、今回のテーマを日本の研究環境で発展させていくための有益な手がかりを数多く獲得することができた。とくに、プロジェクトの後半、本来ドイツ文学研究者である研究代表者が、「漢字文化三千年」というタイトルの京都大学 COE シンポジウムの講演に招かれたり、また「研究と情報の資源化—史料編纂所大型プロジェクトの進捗」という東京大学史料編纂所シンポジウムにコメンテータとして招かれたりしたことは、今回のプロジェクトの意義が徐々に広く認められ、その成果に注目が集められ始めていることを示しているといえるだろう。

(2) 海外の文献学理論の展開をめぐる検討とその実践に関する現状分析は、数々の新しい知見をもたらしたが、なかでも、ドイツ系理論と英米系理論のあいだの歴史的な角質とその和解の様子を深く理解できたことは、今後の日本での展開を探るうえで、非常に重要な成果であった。また、派生的に行っていた翻訳プロジェクトは、日本で初めての編集文献学関連の翻訳書の刊行という成果を生んだうえ、近々もう一冊、海外のデジタルアーカイブプロジェクトを紹介する書物の翻訳も完成し、出版に至る予定である。

(3) 最初の研究支援ツールの開発の試みは、編集文献学に関する理解の相違によって、結局失敗に終わったが、新たなプログラマとのチャレンジでは、独自のデータ構造を持ったデータベースシステム *LiterarySpace* の設計に成功し、スピノフ作品としてそのプロトタイプも作成した(2008年の *Digital Humanities* 国際会議で、この試作品は発表された)。なお、この開発は人文学研究における EUD の実践例ととらえることができるため、理論検討からこの実践に至る経緯を、情報システム学を専門とする研究協力者とともに分析し、経営情報学会で発表することもおこなった。

(4) 各種学会での発表のなかでも、とくに日本アーカイブズ学会の年次大会での研究発表、続いて、当学会の論文誌での論文発表が果たせたことは、本研究の目的のひとつである「アーカイブズ学との接点の模索」において、着実な成果を結べたことを示しているといえるだろう。また、当初は最終年度のみに予定していた国際学会での研究代表者による研究発表は3年目に1度、4年目に2度と計3回実現しており、このように今回のプロジェクトは国際的にも意義あるものに順調に発展した。

(5) 本プロジェクトの最終年度である2009年度においては、研究代表者が主たる企画者となつて、国際会議(「21世紀の編集文献学を考える国際会議」)も開催した。本会議は、日本で初めての「編集文献学」を冠する国際会議であり、日本でほとんどまだ知られていないこの学問分野を国内の研究者に紹介するとともに、海外の研究者に日本の状況を伝える目的のもとに行われたものであった。幸いにも、2日間で世界8カ国からのべ100名に及ぶ参加者に恵まれ、今後の人文学研究基盤のデジタル化の問題をめぐって、有意義な議論が学際的、国際的に活発に交わされる盛況な会となつて、当初の目的は十二分に達成された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

- ① 明星聖子, 「文学研究資料の未来をめぐる一考察—編集文献学とアーカイブズの狭間で—」, 『アーカイブ学研究』(日本アーカイブズ学会), 第11号, pp.92-11, 2009, 査読有
- ② 富澤浩樹・明星聖子, 「文学研究活動に着目した EUC/EUD に関する考察」, 『経営情報学会 2009 年秋期全国発表大会論文集』, pp.288-291, 2009, 概要査読有
- ③ Wittern, Christian et. al., "The making of TEI P5", *Literary and Linguistic Computing*, Vol.24(3), pp.281-296, 2009, 査読無
- ④ Myojo, Kiyoko・Shin'ichiro Sugo, "LiterarySpace: A New Integrated Database System for Humanities Research", *Conference Abstracts Digital Humanities 2008* (The Association for Computers and the Humanities /The Association for Literary and Linguistic Computing), pp.260-262, 2008, 査読有
- ⑤ 明星聖子, 「「心」の問題—文学研究のための資料をめぐる一考察—」, 『漢字文化三千年国際シンポジウム報告書』(京都大学 21 世紀 COE プログラム), pp.14-35, 2008, 査読無 (招待講演)
- ⑥ 明星聖子・内木哲也, 「文学デジタルアーカイビングをめぐる理論的考察—作品とは何か、作者とは何か—」, 『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集—デジタルアーカイブへの新地平』(情報処理学会—人文科学とコンピュータ研究会), pp.153-160, 2006, 査読有

[学会発表] (計10件)

- ① Myojo, Kiyoko, "Public Editing and/or Private Editing: Changes in the Concept of Publication in the Digital Age", International Conference New Directions in Textual Scholarship, Saitama, Japan, 2010/03/26.
- ② Wittern, Christian, "Digital Editions of Premodern Chinese Texts: Methods and Problems-Exemplified using the Daozang jiyao", Resources in the Mark-up and Digitization of Historical Texts, Oslo, Norway, 2009/09/28.
- ③ Myojo, Kiyoko, "Struggling with Soseki: Practices and Problems of Modern Textual Editing in Japan", The Society for Textual Scholarship 15<sup>th</sup> Biennial Interdisciplinary International Conference, New York, 2009/03/20.
- ④ 明星聖子, 「文学アーカイブズと編集文献学の関連をめぐって—文学研究者からの問題提起—」, 日本アーカイブズ学会 2008 年度大会, 東京, 2008/04

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

明星 聖子 (MYOJO KIYOKO)  
埼玉大学・教養学部・准教授  
研究者番号: 90312909

##### (2) 研究分担者

無し

##### (3) 連携研究者

内木 哲也 (UCHIKI TETSUYA)  
埼玉大学・教養学部・教授  
研究者番号: 70223550

ウィッテルン クリスティアン (WITTERN CHRISTIAN)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号: 20333560

保坂 裕興 (HOSAKA HIROOKI)  
学習院大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号: 30219159

大矢 一志 (OHYA KAZUSHI)  
鶴見大学・文学部・准教授  
研究者番号: 80386911